

經濟論叢

第104巻 第3号

哀 辞

故鎌倉 昇教授遺影および原稿

経営戦略について……………	田 杉 競	1
ニュースと「企業性」の接点……………	島 崎 憲 一	23
フィスカル・ポリシーと完全雇用……………	森 岡 孝 二	41

記 事

鎌倉教授逝く

追悼講演（石川常雄・市村真一・堀江保蔵）

追憶談（杉浦一平・吉田進・西村理・引馬滋）

故鎌倉昇教授略歴・著作目録

昭和44年9月

京大経済學會

追悼講演

(故) 鎌倉教授の業績をしのんで

石 川 常 雄

本月7日，鎌倉先生の突然の訃報に接してから早くも10日たちました。しかしこうし

て私自身先生の追悼の会に列席しておりながらなお先生の御逝去が現実のものとしてせまってこない感じがいたしまして、今日いまでもすぐにこの研究室でお元気な姿を見られるような気がいたします。

今日はこの追悼の会に列席させていただき、ただ黙して亡き先生の人柄をしのぶさえ悲しみに耐えられないことでございますのに、生前に教えをうけた者の一人としてその御業績について話をせよということでございます。学浅き身としては教授の経済学各分野におよぶ御業績の一端すらお伝えすることは到底不可能かとも思いますが、その御研究の成果の遺贈を受ける者の一人としましても、失礼を顧みず先生の経済学御研究の側面を私なりにふりかえてみたいと存じます。

私自身先生の御指導をうけるようになりましたのはあのスタンフォード御留学の時期からであったと思います。その後京大助教授、国連経済調査官としての御活躍、京都大学教授御任官と、実践派エコノミストとして、またアカデミックな理論家としてその両者が一体となった活動を御続けになってきたわけでございますが、そのまことに誠実な学生指導、精力的な御研究、また産業、金融業界でのリーディング・エコノミストとしての御活躍をふりかえてみますと、その原動力と申しますか、理論上の基礎構造はこのスタンフォード大学における御研究時代までに構築されていたものと拝察しております。スタンフォード時代の御研究につきましてはとくに二つの大きな柱と申しますか、テーマがあったと思います。その第一は貨幣金融理論を中心とするものであり、のちに著書「金融経済の構造」、「日本の金融政策」に構成されていったものであります。そのいまひとつは、ミクロの経済学、とくに独占の経済学を中心とするもので、これは「価格・競争・独占」、「現代企業論」等の著書に構成されていったものと申せましょう。この二つの象徴的な分野におきまして鎌倉教授の学風——まことに潜越であります……——は理論と実践の両面が常に融合しているということ、とくに大方の常識に追従することなく的確な現実分析の上に理論なり、先生独自のヴィジョンをおたてになったという点であったと思います。

まず貨幣・金融理論の面について考えますと、わが国金融理論の傾向として、ケインズのフロー分析、貯蓄投資分析の立場が中心でありましたのに対し、鎌倉先生の場合は、金融資産の蓄積の効果、つまりビグー効果の拡張と申しますか、ストック分析の重要性を強調されていたということでもあります。金融理論グループの傾向とこうした先生の主張とは若干説を異にするようにも見えたのでありますが、何分高度成長という急速な「流れ」の中にあつてストック分析が若干等閑視される傾向にあつたというのも無理からぬことかも知れません。しかし最近わが国の金融構造も国債、公社債の発行、その蓄積という問題がタローズ・アップされてくるようになり、ようやく先生の御指摘されて

おりましたストック分析が重要性を増してきたようでありまして、先生のヴィジョンがいまわが国でも現実課題となりつつあるといえると思います。先生には金融資産蓄積の効果をわが国経済について計量的にテストするという御研究プランがおりになったときいておりましたが、現実的にわが国金融構造が、そういう研究対象としての特質を熟成させつつあるまさにそのとき、すぐれた研究者を失いましたことはかえすがえすも痛恨の極みと申さねばならないと存じます。

つぎに独占の理論に関連して申し上げますとここでも先生はコンヴェンショナルな理論構成に批判的でいらっしゃいました。つまり「企業数が合併等によって減少してゆくと独占が進行し競争が止揚される」といった公式論には批判的であり、「寡占が進行するとかえって競争とくにノン・ブライズ・コンペティションが激烈になる」と主張されていたのが印象に残っております。そしてさらにこの分野における御研究業績の重要な特徴は、こうしたユニークな理論、ある意味では「熟慮された常識」が、独占理論、価格理論に見られがちなグラフと数式のみによって展開されたのではなく、あたかも法学書の判例集に見られるような、種々の産業の具体例によって裏付けられているという点であると申せましょう。

最近この独占と競争の問題に関連いたしまして巷間エコノミストの間に種々論議をよびました現実問題に、富士、八幡製鉄の合併問題がございます。これにつきましては相当数の近代経済学者またマルクス経済学者のグループが合併に反対する旨の意志表示をされたわけであります。ところで私はその際ある鎌倉教授をよく御存じの方とこの合併問題について話合っていたのでございますが、私は鎌倉先生は合併反対の声明には署名なさってはいまいと申しましたがそのとおりでございました。これはなにも私が先生の学説、理論を知りつくして、そう判断したということではなく、なにか勘のようなものが的中したという感じでございます。私は是非機会をえてこの問題を先生とじっくり論じ御教示を仰ぎたいと思っておりましたが、あの日大阪で偶然おめにかかり「これから新大阪へ行って今日は東京です」とおっしゃってお別れしたのがさいごになりました。私としましては夢の中でももう一度おめにかかって鎌倉先生と経済学の、金融の話をしたという気持ちで一ぱいでございます。重ねて心から御冥福を御祈り申上げる次第でございます。